The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践 : ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から
Author(s)	髙井, 美穂
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 86-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践
―ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から―

髙井　美穂

1.　はじめに

本研究は、日本語母語話者の雑談における価値観の共有のやりとりにみられる規範を、会話分析の手法を用いて明らかにしようとするものである。

私たちは、親しい友人との雑談[1]において、互いに私見を述べ合ったり、価値観を述べ合ったりすることがある。「意見を述べる」「意見を交換する」といった行為はこれまで、公的な性格の強い「議論」「討論」「ディベート」「ミーティング」「シンポジウム」といったものを対象とし、テレビ番組や実験的環境の下行われた話し合いの録音データをもとに、談話の構造や運営に関わる手続き的発話に関する研究が蓄積されてきた（柏崎 1996, 椙本 2000, 寅丸 2006, 星野 2010 等）。これらの研究によれば、話し合いを目的とした会話は一般的に、テレビシンポジウムにおける政治家の討論から大学生同士のカジュアルな話し合いまで、フォーマルさの程度や参加者の上下親疎関係にかかわらず、進行役ないしは複数の参加者による開始の挨拶、合図によって明示的に開始されることが明らかになっている。終了についても同様である。

他方、友人同士の雑談のように、話し合いそのものを目的として集まったのではない者らが行う会話において、意見や考えのようなやりとりがいかにして自然発生的に開始され、続けられ、終えられてゆくのかは管見のかぎり明らかにされておらず、日本語学習者を対象とする会話教材でそうした方法を学習項目として取り上げたものも見当たらない。

本稿で取り上げる会話データは、いずれも「友人同士の会話」の研究のために使用するという目的を告げたうえで、「30 分（協力者によっては 1 時間）程度、自由に雑談をしてください」と依頼して録音した。したがって、この依頼に協力してくれた会話参加者らは、録音中は「雑談をする」という行為をしているはずであり、取り上げるデータは「雑談」であるといえる。

データの中には、冒頭に述べたような、会話参加者らが私見を述べ合ったり、価値観を述べ合ったりしているやりとり[2]が複数観察された。このやりとりが「雑談」として成立するためには、会話参加者らが、いま彼らが従事している活動が「雑談」であること―「会議」や「討論」、「ディベート」、「ディスカッション」等でないこと―を互いに認識し、それを指向し、会話のなかで実践しなければならない。

まちづくりのワークショップにおける雑談を分析した村田（2016）の「話し合いの本題から逸脱した話題で対人関係機能をもつ談話」という定義に代表されるように、多くの先行研究は雑談をそうでないものとの対比から「逸脱」という観点でとらえてきた。一方で、エス

ノメソドロジーにルーツをもつ「会話分析」の立場からすれば、雑談がメインの活動となるような「メイン雑談」（清水 2017）にも規範はあるはずであり、私たちはその規範から逸脱したやりとりを「雑談ではない」と感じるにちがいない。

では、雑談の中で私見を述べ合うとき、私たちはどのようにしてそのやりとりを雑談として続けているのだろうか。本研究では、親しい友人二者間で行われた雑談における、ライフプランをめぐるやりとりを取り上げ、会話分析の手法を用いて、その様相を明らかにする。

高井（2018）では、異なる価値観に理由が必要とされているという観点から、価値観のやりとりが共-成員性の可視化に指向したものであることを指摘した。本稿では、成員カテゴリー化装置（Sacks 1972a）の観点からさらなる分析を行った結果について述べる。

2. データと分析方法

分析に使用したのは、同性の大学生及び大学院生の友人同士二者間の雑談（のべ約 6 時間）の録音、及びその文字化資料である。会話参加者は 9 組（男性ペア 3 組、女性ペア 6 組）18 名で、録音は近畿地方の大学の食堂や研究室にて行った。IC レコーダーの録音ボタンを押した後、筆者は退席し、自由に行ってもらった雑談を 30 分から 1 時間程度録音した。なお、録音中の飲食は制限しておらず、話題も指定していない。

まず、録音の文字化資料から価値観にかかわるすべてのやりとりを抽出し、西阪・串田・熊谷（2008）にしたがい、会話分析に用いられる転記記号を用いてトランスクリプトを作成した。トランスクリプト中の人名等はすべて仮名である。次に、作成したトランスクリプトの各発話に、「意見提示」「報告」といった行為のラベルを付し、やりとりがどのような行為の連鎖からなるかを分析した。さらに、会話参加者らが自身や相手を何者としてカテゴリー化しているのかを成員カテゴリー化装置の観点から分析した。

成員カテゴリー化装置とは、少なくとも一つのカテゴリーと一人の成員を含む母集団に適用される成員カテゴリーの集合とその適用規則からなる仕組みである（Sacks 1972a）。適用規則には一貫性規則と経済規則がある。前者は、同じ母集団内の人をカテゴリー化する際には同一のカテゴリー化装置の中の同じカテゴリーまたは別のカテゴリーを選択するというもの、後者は、ある人をカテゴリー化するのに用いるカテゴリーはひとつで十分である、というものである。

Sacks（1972a）は、成員カテゴリー化装置のうち「母集団のすべての成員をくまなくカテゴリー化できる装置」を Pn 適合的な装置と呼び、本稿で取り上げる性別の集合や、年齢の集合を含む装置がこれにあたる。さらに、山崎（1994）は、性別カテゴリー集合においては要素が二つだけであるために、男性と女性が対立的なカテゴリーとして用いられ、「男性と男性ではないもの」、「女性と女性ではないもの」というカテゴリーの集合が、「男性と女性」という集合と同等のものとして用いられる可能性がある点が特徴的であるとしている[3]。なお、以降、本稿では「性別カテゴリー」ではなく社会的な性別を指す「ジェンダー・カテゴ

リー」と呼ぶ。

本稿で取り上げるのは、分析の結果、ライフプランをめぐる「価値観のやりとり」の典型例と判断した 2 つの事例のうち、「結婚相手の年齢」に関する価値観が相互に披露されていた事例（1）である。なお、例外ケースとの差異を論じるため、議論の過程においては、必要に応じて上述の約 6 時間分のデータからその他のやりとりも取り上げる。

3. 問題の所在

事例（1）は女子大学生上田、下山の 2 名による会話で、両者の共通の友人である男性「ミナモト」の恋愛に関する上田の報告に端を発する結婚相手の年齢に関する価値観のやりとりである[4]。このやりとりは報告の聞き手である下山によって開始されており、次のような行為連鎖からなる。

第一成分:	意見提示 ＜潜在的な不同意＞	43-58 行目
第一成分（やり直し）:	意見提示の促し	64 行目
第二成分:	意見提示	66-77 行目

これに先行するやりとりでは、「ミナモト」に彼女ができたという報告を上田が下山に行っている。その交際相手は「ミナモト」よりも年上であるようで、聞き手である下山は、相手の「彼女」にとっては「若い男の子をつかまえてラッキー」であると評価し、上田はそれに弱い同意を示している。

この評価連鎖に続けて、下山は自身の考えを述べている。それは、女性の平均寿命の方が長いため、未亡人歴の短くてすむ年下と結婚するほうが合理的であるというものである。他方、上田の考えは、女性の精神年齢のほうが高いうえ、女性は自分より知識が豊富な人、能力が高い人に魅力を感じる傾向があるため、年下と結婚してもうまくいかない、というもので、両者の価値観は一致していない。

高井（2018）では、価値観を述べ合う行為が、「私は-私は」連鎖（串田 2001）に類似した営みであることを指摘した。「私は-私は」連鎖とは、一人称の経験報告が、自分にも同様の経験があるかどうかを報告することの誘いとして聞かれうる行為連鎖である。串田（2001）は、一人称の報告がこうした働きをするのは、その報告があるカテゴリーのメンバーであることを利用して発話されていると聞ける文脈があり、かつ聞き手が自分もそれと同じメンバーであることを見出す場合であるとしている。

本稿で取り上げる一人称の価値観の提示は、進路や結婚といった、学生である 20 代の会話参加者らにとってこれからの人生において起こりうるライフイベント等をめぐるものであり、過去の経験報告とはいえない。しかしながら、会話参加者ら自身に関する話題である

点、また、話者間にインフォメーション・ギャップがあるという点で、経験報告と共通する。

串田（2001）にしたがえば、一人称の価値観の提示が、自分にも同様の価値観があるかどうかを提示することの誘いとして聞かれうる行為連鎖をなすのは、次の条件を満たす場合であると考えられる。

（ｉ）その価値観の提示があるカテゴリーのメンバーであることを利用して発話されていると聞ける文脈があり、かつ（ⅱ）聞き手が自分もそれと同じメンバーであることを見出す場合

いずれの条件も、会話参加者らの間に共通の成員性が見出されることが必要である。単に「結婚」や「進路」などの話題について一方の会話参加者が話すだけでは、相手からの価値観の提示は引き出されない。また、次の事例（3）にみるように、一方が単に価値観を述べるだけでは、たとえ共通の成員性が利用されていようとも、相手からも価値観を引き出し、相互に価値観を共有するには至らない。

事例（3）は、女子大学生みのりと静香の2名による会話から抜粋したやりとりで、みのりが、帰省した際に父親に大学院への進学希望の有無を聞かれたことを語っているところである。

事例（3）〔親〕

```
176  みのり   :    でもさ:こないだ:さ:,
177  静香     :    ん:.
178  みのり   :    なんか:お父さん:
179                 (0.4)
180  みのり   :    こないだじゃないわ,こないだ:ん?
181                 (0.36)
182  みのり   :    実家帰ったや:ん?
183  静香     :    ん:(          )の?
184  みのり   :    そう[そんときに:
185  静香     :        [ん:.
186                 (0.52)
187  みのり   :    お父さんが: (.)みのりちゃんは:大学院には行くの>み(h)
188          :    た(h)い(h) な(h)<¥こと言われて¥,
189  静香     :    ん::::[:.
190  みのり   :          [や,行か¥ない¥よ:みたいなんゆってて:,
191                 (0.44)
```

192 みのり : あとで:なんかお母さんとかお姉ちゃん?
193 (0.3)
194 みのり : 別に行ってもいい的な感じだったよねって. duhehe.h
195 静香 : へ:::?
196 みのり : ん:.ね:って.ehehe
197 静香 : → mhh >でも<本人がな:院行って勉強する気なかったらな:,
198 みのり : そう[そうそう:
199 静香 : → [(単に)苦痛やんな:.
200 みのり : ん::[:hhh]やからわ-いや¥行かないけど¥.>みたいな<.
201 静香 : [mhh.h]
202 (0.7)
203 みのり : 感じやっ°た°.
204 (0.82)
205 静香 : → そっか:.[>なんかあたしもなんかお母さんに<,帰ってきて,
206 みのり : [ん:.
207 静香 : → ゴールデンウィーク帰るからさ:
208 みのり : ん:[:.
209 静香 : → [帰ったときになんか,
210 (0.76)
211 静香 : → また,話そ:みたいなことゆわれたけど.
212 みのり : ⇒ なにが:?
213 (0.2)
214 静香 : え,なんか:,
215 (0.3)
216 静香 : <引越しの>こととか hhh
217 みのり : あ::hhh[hh
218 静香 : [hehehe

みのりの報告は、帰省した際、父親に大学院への進学希望の有無を聞かれて進学しないと答えた、というものであった（176-194 行目）。この報告からは、みのりに進学の意志がないことが分かる。この報告の完了点は、静香が自らの進路について話してもよい位置であるように一見感じられるが、静香が報告したのは「母親に、ゴールデンウィークに（静香が）帰省した際に話そうといわれた」という出来事であった（205-211 行目）。

みのりの報告に続いて披露された静香の報告が進路に関する内容でないのは、静香の報告が、みのりの報告に先行する自身の報告の続きであるからである。初めに披露された静香

の報告は、母親と電話で話した際、「イシダ駅[5]」の近くに手頃な家賃でいい条件の物件があると知らされたというものである。母親から下宿先について何かを言われたという経験の語りは、話者らがそれにかかる費用を負担してもらっている立場、すなわち「家族」というカテゴリー集合において、まだ経済的に自立していない「子ども」として自らをカテゴリー化する行為であるといえる。このあとに披露されたみのりの経験は、父親から進路に関して何かを言われたという経験で、やはり学費を負担してもらっている立場であること、まだ経済的に自立していない「子ども」として自らをカテゴリー化するもので、静香の報告に続く第二の物語（Sacks 1995）であった。つまり、最初の静香の報告に、聞き手みのりは（「親」に対する）「子ども」という共-成員性を見出しており、父親から将来に関して何かを聞かれるという類似の経験談を披露しているということである。静香もみのりの第二の物語に同様の共-成員性を見出し、最初の経験報告の続きを語っていた。それゆえに、第二の物語であるみのりの経験報告において、みのり自身の進路（大学院に進学しようとは考えていないこと）が明らかにされようとも、静香はそれを自分に対する語りの誘いとは受け取っていなかった。

そこで次に、会話参加者が相互に自身の価値観を披露していた事例（1）において、どのような成員カテゴリー化装置が利用され、どのようにして価値観の共有が可能になっていたのかを探る。

4. 対関係にあるカテゴリー名の利用

事例（1）に先行するやりとりは、共通の男友達である「ミナモト」に「彼女」ができたという報告で、上田が語り手、下山が聞き手となっている。このやりとりにおいて、友人男性は「ミナモト」という姓、すなわち固有名詞で指示されている（7、29、34 行目）一方、その交際相手の女性は「彼女」という一般名詞によって指示されている（1、3、24 行目）。したがって、上田、下山にとって「ミナモト」は呼び名を知っている「友人」であり、その交際相手は「直接面識のない人」として表示されているといえる。さらに、上田の報告は、「と言っていた」という直接引用の言語形式（5 行目）、「・・・だって」（15 行目）、「らしい」（12 行目、及び 29 行目）といった間接引用の言語形式を含み、笑いながら（5 行目、29-31 行目）、あるいは笑い声で（5、29、33-34 行目）なされている。これらの言語的、パラ言語的特徴は、上田の報告を「うわさ話」として聞くことを可能にしており、このやりとりにおいて両者は、友人である「ミナモト」のうわさ話をしてからかっているといえるだろう。

事例（1）〔結婚相手の年齢〕

```
1  上田    :    °で:<彼女:>>なんやっけ,どこまでゆったっけ<.°
2               (1.57)
3  下山    :    ¥彼女が:,(0.3) 東大[阪に住んどるから:,¥
```

4 上田 : [そうそうそうそう,すぐに行けるよう
5 : に,[¥すい¥た(h)え(h)ら(h)ん(h)だ:って¥ゆっとって:,¥
6 下山 : [うん
7 下山 : → ¥ミナモトそんな熱いやつやったんや¥.
8 上田 : ゜うん゜
9 (0.7)
10 上田 : でも今向こうにおって:,
11 (0.34)
12 上田 : ５月ぐらいに帰国するらしいんやんか,
13 下山 : ん:
14 (0.38)
15 上田 : でも, またすぐ戻ってくんやって:.
16 (0.27)
17 下山 : うん.
18 (1.4)
19 下山 : そ-遠距離やん.
20 上田 : そうねん.
21 (0.34)
22 上田 : 遠距離゜ねんて゜. で,
23 (1.5) ((食べている))
24 上田 : 彼女:
25 (0.83)
26 上田 : ↓は,スカイプで:毎日話したい:
27 (.)
28 下山 : ¥え:[:¥
29 上田 : → [らしいんやんか,でもミナモトは毎日は¥いやや¥[み(h)
30 [ん:
31 : た(h)い(h)な(h))か(h) =ん(h)じ(h)で(h).h
32 (0.76)
33 上田 : ゜>¥けどなんか<写真>とか見してもらったけど,めっちゃ:,
34 : → ミナモトがしあわせ[そうで゜¥
35 下山 : [h:hhh かわいい?彼女.
36 (0.75)
37 上田 : ↑ん:ん:ん:.
38 (2.0)

39　上田　：　そやなあ．まあかわいい,ほうやと,°かわいいと（思う）°.
40　(1.3)

一方、この報告に対する下山の評価（41 行目）は、次に見るように、「向こうからしたら」とミナモトの交際相手である「彼女」の視点でなされているうえ、先行する報告において「ミナモト」と姓で指示されていた友人男性が「若い男の子」と表現されている。この発話は、報告に対する評価を示すとともに、カテゴリー集合「ジェンダー」において、同級生の友人「ミナモト」を「男の子」としてカテゴリー化すると同時に自らを「男の子でないもの＝女の子」としてカテゴリー化し、後続する意見提示（43-58 行目）が「女の子」としての発話であると聞ける文脈を作り出す働きをしている。

事例（1）〔結婚相手の年齢〕

41　下山　：　→　¥でも向こうからしたら若い男の子つかまえてラッキーやなあ¥.
42　上田　：　hhhhhh.h¥そうゆうことになるんかなあ¥. hh[h
43　下山　：　[あたしほんま
44　：　思うねんけどさ,=
45　上田　：　=°うん°=
46　下山　：　女のほうが:15 年,寿命長いやんか:.平均寿命でゆったら.
47　(0.5)
48　上田　：　うん.
49　下山　：　だか[ら:,
50　上田　：　[じゅうご:も?
51　下山　：　15 も違うんやんか:.=
52　上田　：　=↑ほんなち(h)が(h)う(h)ん(h).
53　下山　：　°うん°. やから:,>なんか<年下:の人と結婚したほうが,
54　上田　：　°ん:°
55　下山　：　なんか<未亡人>歴は短くてすむやん.
56　(1.5)
57　上田　：　°ん[:°
58　下山　：　[合理的じゃ↓ない?

下山の発話「¥でも向こうからしたら若い男の子つかまえてラッキーやなあ¥.」は、3 つのことを行っている。1 つは、上田の報告に対する評価を示すこと、2 つ目は、成員カテゴリー化装置の切り替えである。同じ対象の指示のしかたを「ミナモト」という固有名詞から「男の子」というカテゴリー名称へと変えることによって、それを成し遂げているといえる。

3 つ目は、人物指示のしかたを変えることによって、上田にもカテゴリー化の切り替えを誘うことである。

これらの行為を上田が正しく理解したであろうことは、下山の意見提示に対する不同意として差し出された上田の意見提示に、「女の子」（66 行目）というカテゴリー名称が用いられていることから分かる。「女の子」は、カテゴリー集合「ジェンダー」に含まれるカテゴリー「男の子」と対関係をなすカテゴリーであり、下山によるカテゴリー化の切り替えの誘いを理解し、上田と下山に共通する成員カテゴリーを「ミナモトの友人」から「女の子」へと切り替えたことを表す。

事例（1）〔結婚相手の年齢〕

53 下山 : °うん°．やから:,>なんか<年下:の人と結婚したほうが,
54 上田 : °ん:°
55 下山 : なんか<未亡人>歴は短くてすむやん.
56 (1.5)
57 上田 : °ん[:°
58 下山 : [合理的じゃ↓ない?
59 (0.8)
60 上田 : °ん:°.
61 (0.85)
62 上田 : °↓ん:そやな:°.((食べている))
63 (0.5)
64 下山 : >いかん?<hhh
65 (0.8)
66 上田 : → けどやっぱりさ,女の子のほうがさ,
67 (1.2)
68 上田 : 精神年齢[高いやん.
69 下山 : [°ん:ん:°
70 (2.1)
71 上田 : → でもやっぱり:,¥女の習性¥として[は,]こう:自分よりし,
72 下山 : [°ん:°]
73 上田 : >いろいろ<知っ[とるとか,できる人に,惹か¥れてしまう¥から,
74 下山 : [ん:ん:ん:
75 (0.62)
76 上田 : だめなんやってhh結局(h).う(h)ま(h)く(h) い(h)か(h)
77 : へ(h)ん(h)ね(h)ん(h)

5. 例外としての経験の語り

4 節では、会話参加者らの価値観が相互に披露されていた事例において、先行するやりとりで話題の対象であった人物の指示のしかたを変えることによって、成員カテゴリー化装置の切り替えがなされていたことを指摘した。本節では、価値観の不一致が顕在化した直後にみられた「例外としての経験語り」について述べる。

串田（2001）は、「私は-私は」連鎖において、共通経験の不在があえて報告されるやりとりの分析から、経験報告の聞き手が、先行報告が自分にも当てはまるという可能性に指向しており、当てはまらないことは理由を必要とすると見なしていることを明らかにしている。

本節では、価値観のやりとりにおいても同様に、会話参加者らが、「同じメンバーであるならば同じ価値観を有しているはずだ」という規範に指向しており、当てはまらないことは理由を必要とすると見なしていることを主張する。とりわけ、異なることの理由が必要であるという点から論じる。

平均寿命の観点から年下と結婚するほうが合理的であるという下山に対し、上田は女性は自分より知識の豊富な人、能力の高い人に惹かれる傾向があるため年下とはうまくいかないという意見を述べている（66-77 行目）。この上田の考えに対する反論として、下山は再会した小中学校の同級生の男の子が「大人」であったという経験を語っている（92-108 行目）。この経験語りに先立つ前方拡張の第一成分（82-83 行目）は、先を促す反応（Schegloff 2007）が見られる（84 行目）ように、歓迎されている。この位置における経験語りは、適切なものと理解されているといえるだろう。

事例（1）〔結婚相手の年齢〕

```
66  上田  :   けどやっぱりさ,女の子のほうがさ,
67            (1.2)
68  上田  :   精神年齢[高いやん.
69  下山  :           [゜ん:ん:゜
70            (2.1)
71  上田  :   でもやっぱり:,¥女の習性¥として[は,]こう:自分よりし,
72  下山  :                                  [゜ん:゜]
73  上田  :   >いろいろ<知っ[とるとか,できる人に,惹か¥れてしまう¥から,
74  下山  :                 [ん:ん:ん:
75            (0.62)
76  上田  :   だめなんやってhh結局(h).う(h)ま(h)く(h)い(h)か(h)
77        :   へ(h)ん(h)ね(h)ん(h)
78            (0.74)
```

79 下山 : どっ-
80 上田 : 折れて,[年下と¥付き合うか,¥
81 下山 : [ん:ん:ん:
82 下山 : ちゃ:な,あたしそのはな,それに¥関してめっちゃな: ミカ[6]に
83 : ゆいたいことがあってな¥,=
84 上田 : =ゆっ[て:?hhh
85 下山 : [.h:>¥ちょまって:これな<これ録られてるから->恥ずか
86 : しいから,やめとこ:と思ったけどゆうわ=やっぱり¥<.[mhuhu=
87 上田 : [¥でも知=
88 下山 : =.h:hehe:he:]
89 上田 : =らん人やからいいやん¥.mhehehehehe]内(h)容(h)
90 下山 : .h::
91 (0.3)
92 下山 : ¥あんな:?.h:小:学校>中学校一緒やった<子:,¥で:,
93 (0.35)
94 下山 : 高校大学が:違うとこ行った： (0.37)>友達が<おって:
95 上田 : ん[:.
96 下山 : → [>その子男の子やねんけど<,で,(.)そ,同級生やんか:.=
97 上田 : =°ん:.°=
98 下山 : =>で日曜日ご飯食べに<行ってんやんか.
99 (0.41)
100 上田 : ん:.
101 下山 : → ↑大人↓やったで.
102 (0.47)
103 上田 : → #えっ#[おないで?
104 下山 : → [男の子やけど:,↑大人やった.
105 (0.51)
106 上田 : なんでなん?(.)なんなん?な[んで?
107 下山 : → [m も:↑ほんまに, 完全に,大人
108 : → だった.

次に、経験の語りがしていることは何かという問題について考えたい。

下山によって語られた経験は、再会した小中学校の同級生の「男の子」がいかに「大人」であったかというものであった。まず、報告の冒頭では、登場人物である「男の子」が「同級生」であることの念押しが明示的になされている（96 行目）。また、上田は同い年である

ことを改めて確認している（103 行目）。さらに、下に見るように下山は「同い年と思えへんかって」（198 行目）「同い年と思えんくて:.」（217 行目）と畳みかけており、母集団は「同級生」であることが分かる。さて、この母集団「同級生」に含まれる話題の人物は、「男の子」としてカテゴリー化されながら、「大人であった」ということが下山の語りの中でことさらに強調されている。「↑大人↓やったで」（101 行目）、「↑大人やった」（104 行目）と「大人」の部分が高い音で発話されていたほか、「↑ほんまに,完全に,大人だった」（107-108 行目）「めっちゃな,大人やった.ほん:まに大人やった」（194 行目）という発話に見られるように、「ほんまに」「完全に」「めっちゃ」といった程度副詞の使用や、強勢や高い声での発話、音の引き伸ばしといったパラ言語的特徴による評価の格上げ（Pomerantz 1984）がなされている。

事例（1）〔結婚相手の年齢〕

101　下山　:　　↑大人↓やったで.
102　　(0.47)
103　上田　:　　#えっ#[おないで?
104　下山　:　　[男の子やけど:,↑大人やった.
105　　(0.51)
106　上田　:　　なんでなん?(.)なんなん?な[んで?
107　下山　:　　[m も:↑ほんまに,完全に,大人
108　　:　　だった.
109　　(1.4)
110　上田　:　　[え=考え方が?
111　下山　:　→　[>てか<↑たぶん彼が特別(　)なんやけど:,
　　((79 行省略[7]))
191　下山　:　　で日曜日ご飯行ってきた.
192　　(1.5)
193　上田　:　　すごいな:.((食べながら))
194　下山　:　　°で°めっちゃな,大人やった.ほん:まに大人やった.社会人
195　　:　→　やからそうなんかもしらんけど:,
196　上田　:　　°ん:.°
197　　(1.98)
198　下山　:　→　同い年と思えへんかって,((食べながら))
199　　(1.27)
200　上田　:　　(な:)昔を知っとるわけやもんなあ.((食べながら))
201　下山　:　　ん:.

202　　(0.95)
203　下山　：　　ま:む↑かしから大人びてる部分はあったけど:.
204　　(0.7)
205　上田　：　　>けど<さらに:,進化しとった?
206　　(3.5)
207　下山　：　　↑すごい将来のこととかちゃんと考えてて,
208　上田　：　　°ん:.°
209　　(1.0)
210　下山　：　　自分のやりたいことやるべきこと.
211　　(0.53)
212　下山　：　　ちゃん[とほんとに考えてて,
213　上田　：　　　　[°ん:.°
214　　(0.7)
215　下山　：　　しかもも: (.)気遣い?
216　上田　：　　ん:.
217　下山　：　→　同い年と思えんくて:,
218　上田　：　　hm:::::::

また、この「彼」は、同級生の母集団において「男の子」というカテゴリー集合に期待されるイメージから外れる存在として語られている。「男の子やけど大人」（104 行目）、「同い年と思えへんかって」（198 行目）、「同い年と思えんくて」（217 行目）や、「たぶん彼が特別（　　）なんやけど」（111 行目）、「社会人やからそうなんかもしらんけど」（194-195 行目）といったように、である。

團（2013）は、中学校における参与観察をもとに、「ケータイ小説」の読者であること、及び読書をめぐる活動を分析している。それによれば、ケータイ小説の「読者」である「女子」たちにとって、読後の感想語りが重要な活動である。感想は「女子」である主人公（作者）への共感に関するものであり、その共感は「女子」というカテゴリーのもとに可能になっているという。一方、「男子」は「読者」でなくてもケータイ小説を「エロ」と冷やかす読解態度を示すものであることが規範となっており、そうでない「真面目な」読解態度を示す男子は例外として理解されていたと分析している。事例（1）においても、下山にとって「彼」は例外として理解され、語られていた。

上田の意見提示は母集団「同級生」において「女の子」のほうが精神年齢が高いというものであったが、下山の経験語りは、母集団「同級生」に含まれる「男の子」で「大人」な人が身近にいるという主張になっており、異なる価値観の理由を述べるために開始されたものであるが、下山の語りに対する上田の評価発話には「すごいな:.」（前頁トランスクリプ

ト 193 行目)、「いいなあ,そうゆうの.」(242 行目) のような終助詞「ね」の使用、及び「取っといてくれるん」(233 行目)、「そこまでしてくれたん.」(262 行目) のような恩恵を表す授受表現「てくれる」の使用が見られ、下山と同じ立場で聞いていることが分かる。もはや価値観の相違は問題になっていない。

事例 (1)〔結婚相手の年齢〕

217 下山 : 同い年と思えんくて:,
218 上田 : hm:::::::
219 (0.47)
220 上田 : → た[とえば?
221 下山 : [なんか,
222 (0.35)
223 下山 : ご飯,あじゃ:なんか 12 時に:ビッグマン集合な:ってゆうや
224 : んね?
225 (0.68)
226 下山 : ほんで:オッケー,じゃ:(1.27)お店適当に探しとくわ:って.
227 (0.89)
228 上田 : → まずちゃんとその辺[は:
229 下山 : [ん:.
230 (0.92)
231 上田 : → 先に:,
232 (0.36)
233 上田 : → 段取りしといて,取っといて[くれるん.
234 下山 : [そう:.
235 下山 : >なんか適当に探しとくわ:って>別になんか< かえ,適当にっ
236 : てゆうとこが別にあたしの希望があったら:
237 (0.26)
238 下山 : 通るよ:みたいな感じやんか.
239 上田 : うんうん.
240 (0.86)
241 下山 : で素敵やな:と思って:,
242 上田 : → ん:.いいなあ,[そうゆうの.
243 下山 : [で:そう,でなんか結局,なんか実家:あたし
244 : な:実家そのままな:あたしのうちの近くにあるもんやと思っ
245 : てたら,

246 上田 : ん:.
247 下山 : もうお父さんが単身赴任で東京やから↑家族ごと東京に引っ
248 : 越してたらしくて,
249 (0.74)
250 上田 : お:ん.
251 下山 : 泊まるって↑ホテルに↓泊まったらしくて,あたし:とご飯
252 : 行くためだけに.
253 (0.37)
254 上田 : あっ,サエピー[8]は実家にそのまま:[泊まってくもんや[と思っ
255 下山 : [そう: [と思っ
256 上田 : てたら,
257 下山 : てたら,
258 (0.7)
259 下山 : ホテルやって:,
260 上田 : → え::::
261 下山 : で:,
262 上田 : → そこまでしてくれ[たん.
263 下山 : [そう:.

以上に見てきたように、「女の子」としての価値観の不一致が顕在化した後に見られた経験語りでは、例外としての「男の子」が語られることによって、「(同級生の)『男の子』とはこういうものである」という評価が共有されていた。この評価の共有によって、たとえ価値観は一致していなくても、カテゴリー集合「ジェンダー」を構成するカテゴリー「女の子」としての彼女たちの共-成員性が維持されているのではないだろうか。

6. カテゴリーに結びついた活動

上掲した事例（3）では、カテゴリー集合「家族」において、会話参加者である静香とみのりは、自身らを「親」に対する「子」としてカテゴリー化していた。一方、事例（1）ではカテゴリー集合「ジェンダー」において、上田と下山は自身らを「男の子」に対する「女の子」としてカテゴリー化していた。ここで考えなければならないことは、両事例ともに会話参加者らが共-成員としてふるまっていながら、一方の事例（1）では「結婚相手の年齢」という話題で会話参加者らの価値観が相互に披露されていたのに対し、他方の事例（3）では「進路」という話題では両者の価値観が披露されることはなく、「親から何かを言われた」という共通経験の披露のみであった点である。進路選択も価値観にかかわる話題であるにもかかわらず、なぜ価値観の相互披露には至らなかったのであろうか。

これについては、カテゴリーに結びついた活動（Sacks 1972b）か否かという観点から記述が与えられそうである。「結婚」はカテゴリー化装置「ジェンダー」に結びついた活動であるのに対し、「進路を決める」あるいは「進学する」といった行為はカテゴリー化装置「家族」ないしは会話参加者らの「子ども」というカテゴリーに結びついた活動ではない。ただし、会話参加者らが「大学生の子どもを持つ親同士」であるなど、カテゴリー集合のなかの「親」カテゴリーであるならば、子どもの進路に対して意見を述べるということは「親」カテゴリーに結びついた活動であるといえ、相互に価値観が披露されやすいのではないかと思われる。

7. まとめ

本稿では、女子大学生の雑談におけるライフプランをめぐるやりとりを成員カテゴリー化装置の観点から分析した結果について述べた。本稿で取り上げた事例では、価値観の共有に先行するやりとりに登場する第三者（友人）の指示のしかたを変える、具体的には名前から「男の子」という会話参加者らのカテゴリーと対関係にあるカテゴリー名称を用いた指示に変えることによって、価値観のやりとりが開始されていた。相互に披露された価値観の不一致が顕在化した後は、最初に価値観を提示した話者が反論としての経験語りを行っていた。この経験語りは例外的な「男の子」を身近に知っているというものであった。例外について語ることによって、例外でない一般的な男の子に対する評価が共有され、「男の子」を評価することによって会話参加者らはその対関係にある「女の子」としてふるまい続けていた。

注目したいのは、一連のやりとりにおいて、最初の意見提示の際に選択された成員カテゴリー化装置「ジェンダー」が利用され続けていたという点である。「『女の子』とはこういうものである」という形で提示された意見は会話参加者間で一致しなかったが、一致させる方向へは向かわず、対関係にある「男の子」について語ることによって、「女の子」としての共-成員性が維持され続けていた。

紙幅の都合上、本稿では 1 事例しか取り上げることができなかったが、雑談としての価値観のやりとりにおいて、共-成員性への指向が終始みられたことは重要な示唆であると考える。話題とカテゴリーに結びついた活動との関連が、相互に価値観を披露するか否かに関わっていることも示唆されたが、より詳細な分析は別稿に譲りたい。

付記

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 JP19K13231）の助成を受けた。

注

[1] 本稿では、筒井（2012）の定義にしたがい、「特定の達成するべき課題がない状況におい

て、あるいは課題があってもそれを行っていない時間において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」を「雑談」とする。

[2] 本稿で取り上げる「結婚相手の年齢」のほか、「経済的豊かさ」、「進路」、「オフィスでの服装」、「ゴミ出しのマナー」「観光地としての原発」などがあった。

[3] 本稿で取り上げた事例（2009 年収録）においては、性別カテゴリー集合は山崎（1994）で指摘されているような二項対立的な捉え方がなされているが、平本（2017）で述べられているように、どんなカテゴリー同士が 1 つの集合をなすかは、時代や社会状況によって変わりうる問題である。

[4] 便宜上、年下と結婚するほうが良いと考えている会話参加者を「下山」、そうでないほうの会話参加者を「上田」とする。

[5] 駅の名称（仮名）。

[6] 「ミカ」は上田の名である。

[7] 登場人物である「同級生の男の子」は東京の大学に進学したこと、在学中にある資格を取得して就職したこと、4 年次は勤務先の有休を使ってゼミに出席し、卒業したという話を聞いたことを語っている。さらに、現在就職活動中で、面接で落ち込んだことを SNS に書き込んだ下山に対し、下山の住む大阪に行く予定があるので会わないかと連絡があったことを語っている。

[8] 下山のニックネーム。

参考文献

柏崎雅世（1996）「インフォーマルな［と］相談における談話運営の発話」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』22, 東京外国語大学, 15-31

串田秀也（2001）「私は-私は連鎖：経験の『分かちあい』と共-成員性の可視化」『社会学評論』52(2), 日本社会学会, 214-232

清水崇文（2017）『雑談の正体』凡人社

椙本総子（2000）「人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造」『世界の日本語教育』10, 国際交流基金, 221-239

髙井美穂（2018）「『価値観が異なること』を通して可視化される共-成員性―日本語母語話者の友人間の雑談におけるライフプランをめぐる価値観のやりとりの会話分析―」『タイ国日本研究国際シンポジウム 2018 論文集』, 213-217

團康晃（2013）「学校の中のケータイ小説：ケータイ小説をめぐる活動と成員カテゴリー化装置」『マス・コミュニケーション研究』82, 日本マス・コミュニケーション学会, 173-191

筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版

寅丸真澄（2006）「日本語の討論の談話における『意見表明』の構造分析」『早稲田大学日本

語教育研究』9, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 23-35
西阪仰・串田秀也・熊谷智子（2008）「特集：『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」『社会言語科学』10(2), 社会言語科学会, 13-15
平本毅（2017）「成員カテゴリーの使用」『会話分析入門』勁草書房, 243-258
星野祐子（2010）「課題解決型話し合いにおける手続き的発話」『都留文科大学研究紀要』72, 都留文科大学, 41-59
村田和代（2016）「まちづくりの話し合いを支える雑談」村田和代・井出里咲子（編）『雑談の美学―言語研究からの再考』ひつじ書房, 51-70
山崎敬一（1994）「エスノメソドロジーと性別カテゴリーの問題」山崎敬一（編）『美貌の陥穽：セクシュアリティーのエスノメソドロジー』ハーベスト社, 5-32
Pomerantz, Anita. （1984）Agreeing and disagreeing with assessments; some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 57-101
Sacks, Harvey. (1972a) An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press, 1972, 31-73（北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法―会話分析事始め―」北澤裕・西阪仰編訳（1995）『日常性の解剖学』マルジュ社 pp.93-174）
Sacks, Harvey. (1972b) On the analyzability of stories by children. In D. Hymes and J. J. Gumperz. (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. Holt, Rinehart and Winston. 325-345.
Sacks, Harvey. (1995) *Lectures on Conversation*. *Vol.2.* Oxford, UK; Cambridge, Mass.: Blackwell.
Schegloff, Emanuel. (2007) *Sequence Organization in Interaction: A premier in Conversation Analysis.* Cambridge University Press.